

中国のほんの話 (31)

世紀の文人・巴金

蔭山 達弥

巴金（はきん）はかつてこう言った。「僕は君達のために生きている。」

陽の光が窓の外から病室に射し込んでいる。光は次第にほの暗くなっていった。

空の色は老人の衰弱と呼応するかのように、2005年10月17日の午後3時すぎ、病床の巴金の鼓動は1分間に70回あまり、呼吸器のせいかどうか分からないが、老人は水から上がった魚のように、唇を合わせている。午後5時過ぎ、鼓動は50回に下がり、唇は動かなくなった。胸はかすかに動いている。医者は家族に言った。「残された時間は1時間くらいです。」突然、重症隔離病棟の医者が外に向かって家族を呼ぶと、娘の李小林が飛び込んできた。父の耳元に引っ付いて、大声で呼んだ。「お父さん！お父さん！」「お父さん！いつまでも私と一緒に居ると言ったじゃないの。」一つ一つの叫び声が密閉されたガラス窓を通して、殊の外ははっきりと聞こえた。7時6分、陽光はすでに隠れてしまい、老人の心音は停止した。数十年片時も離れなかった娘は声を上げて泣いた。

事実、これは予想された別れであった。

101歳の老人はすでに6年間も華東（自宅）を離れていた。

1999年の2月、病状が重くなると、巴金の病気はよく再発した。気管を切開した老人は鼻からの栄養だけに頼って生命を維持していた。巴金をよく知っている人は皆分かっていた。病気になる前の巴金は胃がずっと良く、好みの食べ物に出会うと、いつもそばの人に少し残しておいた。巴金は風采をととても気にし、晩年は行動が不自由であっても、客が来ると、必ずきちんとした身なりをし、動けさえすれば、客を入り口まで送って行った。

臨終前の命は巴金に喜びを感じさせなくなっていた。気管を切開後、はっきりした思考と何も言えない肉体は一種の固定された苦しみを形作った。知り合いの訪問は減っていった。同時代の老人たちが先に逝き、巴金の脆弱な肉体は外界の病

原菌に感染しやすくなっていたからだ。内心の感情から言えば、巴金の身体にたくさん刺し込まれた管、早くから着けられなく

なった入れ歯、かまわなくなった衣服を見たら、永遠に刑に処されている人のようで、見るに忍びない。これは老人に対するいじめだ。巴金は自分の姿を他人に見られなくなかった。巴金はかつて自分の病状が重くなったら、安楽死させるように言ったことがある。病苦のなかで巴金は仕方なさそうに言った。「僕は君達のために生きている。」生きていることが彼の職責（中国作家協会主席）になったかのようだ。

巴金は1904年11月25日、四川省成都に生まれた。彼は生まれた場所に愛着を持たず、小さい時から外へ逃げ出そうとしていた。家を飛び出そうとしていた当時のインテリは好んで巴金の本を読んだ。『家』、『春』、『秋』は青年が故郷から逃げ出し、夢を求める象徴になった。多くの者はそれを小説として読まず、人生の苦しみを発散するテキストとして、多くの共鳴するものがあつた。

中国作家協会副主席の王蒙は北京で開かれた追悼会の席上で、「巴金は話すのが上手い人では決してなかったが、いつも素朴な言葉で中国文学や中国の作家に自分の期待を述べていた。どの言葉も巴金のずっしりと重い思考が見てとれる。私の記憶の中で巴金がよく言っていたのは‘真実を語れ、自分の心を読者にさらけ出せ。’（以下略）」と述べた。

巴金の生前の功績で決して忘れてはならないのが、1957年、大型文学雑誌『收穫』の創刊に携わったことである。『收穫』は作家の風格を重んじ、編集部で書き直すようなことはせず、意見を書いて作家に渡した。原稿料は印刷に回るとすぐに出した。『收穫』は今も巴金の精神が息づいている。

巴金の遺骨は妻の蕭珊の遺骨と共に11月25日、遺族の手で海に撒かれた。

かげやま たつや（助教授・中国文学）

